

氏名	氣多雅子
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第352号
学位授与の日付	平成10年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	ニヒリズムの思索

(主査)

論文調査委員 教授 長谷正當 教授 藺田 坦 教授 藤田正勝

論文内容の要旨

本論文は主論文「ニヒリズムの思索」と参考論文「宗教経験の哲学—浄土教世界の解明—」からなる。進捗するニヒリズムが本論文の主題である。

主論文は二部から構成される。第一部は「ニヒリズムの思索に向けて」と題され、ニヒリズムの思索の境位が明らかにされる。ニヒリズムという言葉は、近年、哲学の場でも宗教の場でも主題的に語られなくなっているが、そのことはニヒリズムが自明なものとしてそれ自身を隠すに至ったからである。哲学も宗教もニヒリズムを見失うことによって、実在から遊離し、それ自身を見失った。したがって、現代の進展したニヒリズムを思惟するために、まずニヒリズムを考察する視座を哲学の場に探り確保することから始められる。

第一部、第一章において、ニヒリズムを思惟する視座を見いだすために、宗教と哲学との関係が考察される。宗教と哲学の関係はヨーロッパの哲学史において一般に、信仰と理性という図式で捉えられてきたが、現代世界の精神的状況のなかではこの図式は通用しなくなっている。経験と思索ということから考えてみても十分ではない。そこで、現代世界におけるニヒリズムの経験ということが哲学と宗教との関係を考察する定点として捉えられる。近代のニヒリズムは、一切の認識、行為の基礎としての「根源的ドクサ」の衰退という、一つの歴史的な全体経験を成立せしめる。この経験はそれ自身について哲学的に思索することを呼び求めるものである。

第二章において、前章では思索の局面から追求されたニヒリズムは言語の局面から追求される。経験はそれ自身のうちに言葉による自己理解を含み、言葉によって形成される。言葉によって形成された経験のリアリティは、充実したものでもありうるし、空虚なものでもありうる。歴史的世界における文化的生存の経験はその根底に、言葉において増殖する空虚を構造的に秘めている。現代世界においてこの空虚は肥大して言葉全体を覆い、それ自身で実在性をもった観念的世界が空虚化するという事態が生じている。ニヒリズムの思索の境位はここにも現れている。

第三章において、西谷啓治のニヒリズムの経験が哲学的にどのように展開されたかが考察される。西谷は、歴史的ニヒリズムを考察するために、「歴史への問い方自身が歴史的であるような」歴史哲学的視座を提示し、それを「実在の實在的自覚」とする。一方、西谷はニヒリズムの超克という課題に対して解答を与えるものとして「空」の立場を提示する。空の立場において「永遠の今即歴史的今、歴史的今即永遠の今」が現成することによって、歴史の意味が回復されると西谷は考える。この思想は、西谷の意図に反して、東洋の思想によって西洋のニヒリズムを克服するという図式に陥ってゆき、ものの如実相において歴史の意味を回復するという彼の試みは反転して、逆にニヒリズムの深淵を露呈し、その中へ引き込まれてゆく結果となる可能性を有している。

第四章では、ニヒリズムの歴史性を西谷とは別の仕方でも徹底的に思惟したハイデッガーの思想が考察される。ハイデッガーが現存在の根本様態とする「理解」の運動は「解釈」へと展開することにおいて、それ自身を歴史へと繰り出す仕方でも歴史形成的となる性格をもっている。このような、論理主義的前提には立たない「理解」の働きが捉えられることによって、ニ

ヒリズムの歴史性の本質に切り込む思索が可能になると考えられる。こうして、ヨーロッパのニヒリズムの歴史は、彼の後期の「存在歴史」の思想において追求されることになった。形而上学の歴史のなかではニヒリズムは克服すべきものとして現れ、ニーチェの「力への意志」の形而上学はニヒリズム克服の思想として樹立されるが、このような形而上学的思惟はニヒリズムの本質を捉えないものだと、ハイデッガーは論じる。人間をニヒリズムの本質の前に連れ来る思想を、彼は存在歴史的思惟と呼び、そこにおいて、人間が英雄的にニヒリズムを超克するという態度を退ける。超克という態度への批判は、ニヒリズムの諸現象が否定的性格をもって我々を威圧してくることから我々を解放することになる。

ハイデッガーの存在歴史の思想は、ニヒリズムの歴史性の新たな位相を開発し、始原的なものの回想という一つの思索の形態を導き出した。ただし、回想は、それ自身どこまでも歴史的文化的で有り続け、歴史において始原的なものを問い尋ねる思惟である。彼の思索のあり方は、我々の眼差しを我々自身の思想伝統へ振り向けるように誘うものである。その思索の境位を特徴づけるのは、そこにおいてニヒリズムは超克されるべきものとして現われないということである。だがそのことは、ニヒリズムの思索を、世界歴史を背負い世界歴史を引き受ける思索となすことになる。その引き受けは過ぎ去ったものとするべきものとの間に張り渡されるこの思索の動性そのものにおいて、専ら具体化されるものであり、その動性において、ニヒリズムの思索は言葉のもっとも強い意味で、求める思索であることが顕著になる。そこで求められるものを、ハイデッガーは「始原的なもの」と呼ぶ。

第二部の考察は、基本的に、現代の進展するニヒリズムに照準を合わせつつ、我々自身の思想伝統を見遣りながら、自己を問い自己を求める思索となる。

第一章では、仏教の問題境域の中で「始原的なもの」は如何なる仕方で追求されてきたかということが、大乘經典に焦点を当てて探求される。大乘は仏説ではないという批判は既に大乘教団成立時に諸部派教団からなされていたが、『大乘莊嚴經論』によって大乘側の論駁を検討すると、その根幹にあるのは、大乘の教説は真理であり、このような真理を説くものは仏陀であるという確信である。ここには、テキストと解釈の独特の関係が見いだされる。西洋の文献学的解釈学的発想ではテキストの次元と解釈の次元とは理念的に区別されているが、仏典の場合、解釈の次元がテキストの次元に踏み込みながら、解釈の次元の生動性がテキストの次元に揺さぶりをかけるような仕方で展開する。この揺さぶりがテキストの次元そのものの自己運動を開始させるに至るとき、原テキストを読むことにおいて新しいテキストを創造するという態度が出現し、そういう仕方で「始原的なもの」が追求されていたと考えられる。このことを、現代解釈学の地平において考察し直してみるならば、現代解釈学は本質的に宗教的なものとは異質なものを思考していることが見えてくる。

第二章では、前章で經典製作というあり方において捉えた事態が、伝統の創出という角度から考察し直される。ガダマーの伝統の思想は、被投的企投たる理解の被投性の側面に重点を置くことによって、伝統ということ人間存在の歴史的規定性に縮めてしまっている。だが、宗教における伝統の現われ方を見ると、むしろ企投的側面が重要な位置をもっている。伝統は、主体が自らの真理把握を古人のそれと同定するという行為を通して、主体と古人とを包摂する共同空間を開くことによつて、創出される。だが、現代の科学技術の中には伝統形成の運動に対する反対運動が含まれており、それによつて科学技術が本質的にニヒリズムに属することが顕になっている。そこにおいて、ニヒリズムがヨーロッパの歴史の帰結という由来を越えて、世界史的運動として進展する。この世界史的ニヒリズムに侵食された現代世界での伝統創出は、特定の歴史文化の制約された自己存在の直接の基盤を世界史的規模で受け取り直すことを必要とする。

第三章では、現代の進展したニヒリズムにおいて、宗教的信がドクサ的なものとして成立するという事象が「他界の観念」をもとに示される。「他界」という死後の世界に生まれる信を取り上げ、人間が世界のうちに住み得るということに関してドクサ的な信がそのような権利と意味をもつかの、見通しを得ることがそこで求められる。カントは「世界」を諸現象の全体ないし総体として規定するが、この世界概念の考察からは他界という概念のあり場所を見通すことはできない。そこで、より具体的に世界性を考察するために、ハイデッガーの世界の叙述について検討され、「世界内存在」、「死への存在」の分析を手掛かりとして、我々の世界における生存が死後世界の表象を生み出す構造的可能性をもっていることが見通される。つまり、他界は「方向」として狙われる。この構造的可能性を他界の表象へと具体化するの、人間の身体性である。したがって、他界への信は人がこの世界に住み込む上で不可避的に起こってくるものであるが、それが文化的表象への信であるかぎり、死という事柄が引き起こす苦悩を最終的に救済することはできないことが示される。

第四章では、ヴァーチャル・リアリティの問題が考察される。我々にとってリアルなものは何かという問いは、何物もリ

アリティを持ち得ないという可能性を見やりつつ、指し示されてくる。そこで、現代世界におけるリアリティの変容と、それに伴う主体の在り方の変容が考察される。ハイデッガーは、世界が像になるということが近代の本質を表しているという。世界が像となるということは、人間が存在者のうちで主観となるということと同一である。この世界像を組み立ててきたのは近代的自然科学であるが、科学技術の力が我々の生活に浸透してゆくなかで、世界が像になるという事態の進展と解体が生じてくる。世界の全体性を構築するものが技術となることによって、主体は全体性を奪取されて暫定的主体以上のものではなくなる。そこに感性的に切り縮められた宗教的体験が宗教現象の中核となるというニヒリズム的事態が蔓延してくる。技術の支配にともない、世界のリアリティのあり方は変容し、現代技術が物に虚無を組み込む営みを加速させていった結果、現実と非現実の相対化が出現するにいたる。ヴァーチャル・リアリティの技術の出現によって、ニヒリズムは新たな段階をむかえることになる。

第五章では、現代の暫定的主体の経歴が追求される。近代の自己の完成された形態はキェルケゴールの内面性に見いだすことができるが、彼の自己の構造を神を撥無しつつ引き継ぐのはハイデッガーの自己のあり方である。世界から自己自身へと将来する現存在のあり方においては、内面性は世界へと開かれることとなり、そこから、世界から自己を理解することが唯一の自己理解の有り様であるという事態が帰結する。だが、その世界は無機的宇宙における神の不在と内面的自己における神の隠れという二重の神喪失を背負うものとなり、それによって世界の深さを覆い隠そうとする暴力的なまでの動向が世界を支配することになる。自己は世界から追い出され、内面性を奪われ、架空の言葉となって宙に浮く。我々はそのような事態に直面していることが示される。

第六章では、内面性の自己の系譜が絶えることによって、世界は理解を拒絶するような不条理な昏さを示してくる。諸個人間の行為的關係が、彼らの意志とは無関係な客観的關係構造を存立させて社会というシステムを出現させる。無意識が私のなかで、私の背後で私を支配するものとなる。他者の暴力と私の暴力とがせめぎあう。そのような仕方世界で世界の昏さがあらわれる。この暗さのなかで個人も他者もくっきりと立ち上がることはできず、ドクサが人間の信を占拠する。ここで問われてくるのは、ニヒリズムという歴史的命運の使命のなかで無効でない私がどうして出来るかということである。

「私」という事柄の原点にあるのは、一切の存在のリアリティがここにおいて集約的に立ち現れることの宣言である。世界歴史を引き受ける責任と、しかもその責任を担うことができないという負い目を背負うものとして、現代世界が背負う歴史の厚みのなかで、「我々」が立ち上がるができるならば、「私」はその「我々」に背を押されながらおずおずと立ち上がるができるのではなからうか。ニヒリズムを生き抜くことを放棄することができない限り、世界の昏さを溶かして「私」を宣言することが追求されなければならないことが示される。

論文審査の結果の要旨

本論文は主論文『ニヒリズムの思索』と参考論文『宗教経験の哲学—浄土教的世界の解明—』からなる。参考論文において論者は、宗教的な意味宇宙が本来のリアリティを欠いた現代世界において、如何にして宗教的世界を自己化するかという企図のもとに、浄土教のメッセージを解釈することを試みた。その企ては、現代社会に浸透しているニヒリズムを超える視点を浄土教のうちに探ろうとしたもので、すでにニヒリズムの地平のなかにあった。しかし、そこでニヒリズムを超える基点とされた自己が、現代の進展したニヒリズムのなかで既に解体しつつあることの認識から、論者は参考論文の背景にあったニヒリズムを主論文では正面に取り上げ、そこからニヒリズムに対峙しうような宗教的意味世界の探索へと改めて向かう。こうして、本論文は、ニヒリズムの問題をめぐって織り合わされた二つの部分からなっている。

本論文において論者がニヒリズムを問う角度は、ニヒリズムを思索の直接の「対象」とすることではなく、現代世界においてニヒリズムを思索する仕方や意義、すなわちニヒリズムの思索の「境位」を明らかにするところにある。そこに本論文の意義と特色がある。

ニヒリズムという言葉は、近年、哲学や宗教の場でも主題的に語られなくなり、ニヒリズムは見失われて過去のものとなった感があるが、ニヒリズムが語られなくなったことはニヒリズムが解消したのではなく、一層進展したことで、問いの対象として意識化しえない程に我々のうちに入り込んでいることを意味する。現代社会における宗教の諸現象はそのような見えなくなったニヒリズムを反映している。論者はそのような見地から、ニヒリズムは今もなお哲学の大きな問題であり、哲学

が宗教を問う際に不可避なものとして、ニヒリズムの問題を思索する視座を哲学において確保することを求める。

ハイデッガーや西谷啓治によって1940年代に追求されたニヒリズムは、その後進展して新たな位相をもつに至っているが、そのような進展したニヒリズムの状況を踏まえて、ニヒリズムを主題的に考察した宗教哲学的研究は、我が国では西谷の研究以後、本論文が初めてである。その点で、本論文はこの分野の研究において独自で重要な位置を占めるものであり、その意義は大きい。

主論文は二部から構成されている。第一部ではニヒリズムの思索の境位が明らかにされる。第二部では、現代の進展するニヒリズムに照準を合わせつつ、言語、テキスト、科学・技術、伝統、世界像、自己、他者などの問題が考察される。本論文に見られる特色や創見は多いが、高く評価されるものとして以下の諸点があげられる。

1) 論者は、現代社会に浸透してそれ自身を隠すに至ったニヒリズムが蚕食している領域を、フッサールが「生活世界」とした「根源的ドクサ」のうちに捉えて、現代の呪術化した宗教意識の変容をこの「根源的ドクサの衰退」という角度から考察する。宗教と呪術との関係は古くて大きな問題であるが、論者はニヒリズムという観点からアプローチすることで、この問題に新しい局面を開いている。

2) 論者は、従来のニヒリズム研究が意識的・無意識的に立脚していた超克という観点は超歴史的となる傾向があり、現代の進展したニヒリズムの状況を見る眼を欠くことになるとして退ける。そして、ニヒリズムに対峙する道を歴史において「求める思索」の方向に探り、それとの関連においてハイデッガーの「始原的なものの回想」という思索のもつ可能性を追求する。

3) 論者は、ニヒリズムの問題を「リアリティ」をめぐる問題として捉え、現代のニヒリズムにおけるリアリティ感覚の変容を、近代的世界像の成立と近代的自己の成立および現代の科学や哲学における世界像の解体と自己の解体という角度から追求する。そして、感覚主義的・心理主義的なものへと切り縮められた宗教体験を重視する現代の傾向を、自己の解体にともなうリアリティ感覚の変質との連関において追求する。

4) 論者は、ニヒリズムに対峙する方向を、単独者の英雄的超克というごとき歴史からの離脱の方向ではなく、歴史における忍耐という方向に探り、「真理を共有する我々」という観点から伝統の問題を追求している。そのような観点が、本論文の第二部における言葉、伝統、自己、他者に関する考察を導いている。とりわけ、伝統の切断および創出という観点からのニヒリズムの分析における、「始原的なものの回想」と「真理を共有する我々」という立場との連関の解明には意味深いものがある。

5) 本論文の全体において、「ニヒリズムの思索」と「自己の思索」とが重ねられている。ニヒリズムを自己化しようような自己が解体し、自己が内面性を奪われて「暫定的な主体」となったところに論者は現代のニヒリズムの特質を捉えているが、そのような主体の由来と経歴を近代的自己の成立から跡付けた論者の分析は的確で説得的であり、きわめて優れたものである。

現代の見えざるニヒリズムを取り上げ、それを思索する視座を哲学のうちに確保することを目指した本論文は、現代における宗教哲学の一つの方向を示したものとして重要な意義を有する。しかし、本論文にはなお再考が望まれる点がある。論者は、西谷の「空の立場」は超歴史的であり、本人の意図に反してニヒリズムに対して歴史の外ないし上から解答を与えるという方向に陥っていくとして、否定的に評価する。この評価は、ニヒリズムを歴史的現象として捉える論者の立場から首肯されるが、それは、ニヒリズムとの関わりにおいて解釈された空の思想の現代における可能性の吟味を捨象したものであって、その側面への吟味が加えられるべきと思われる。また、見えざるニヒリズムに焦点を当てた本論文の叙述は一貫した筋道によって運ばれており、論者の思索力をよく示すものであるが、叙述はややもすると難解なものとなる傾向がある。叙述をより平明にすることが望まれる。だが、これらの点は、現代の宗教をニヒリズムとの関わりから追求した本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値のあるものと認められる。平成10年9月25日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問した結果、合格と認めた。